

GR
白雲郷

とりお



37

昭和51年10月1日

表 紙 説 明

宗教法人 白雲山 鳥居観音本堂

- 本堂内には、ご本尊聖観世音菩薩外六観音の華れいな像が安置されています。
- 格天井には、大家によって描かれた花の絵が三十枚あります。

とりゐ 第 37 号 目 次

表紙	白雲山の紅葉	
道光禪師御法話(其十九)	一
生きてゐる観音経	光山義雄	三
大鐘楼建立に当って	平松桐江	五
西遊記(其三十一)	岡部千三	六
田舎医者(其十七)	見川鯛山	八
老万體観音奉納者芳名	一〇
納経者芳名	十一
御奉安のおねがい	十二
大灯ろう奉納者芳名	十一
鳥居観音のたより	
裏表紙	鳥居観音地図	
秋から新年行事案内		



道光禪師
(故高階瓏仙猊下)
御法話

(其の十九)

禪の宗意から仏教を話す(その一)

ただ今、日本の仏教の宗旨で、禪宗、真宗、浄土宗、日蓮宗というような宗旨は、みんなの耳に入っておりますが、わが仏教が、日本にはじめて渡来したころ、さかんであった宗旨が、多少ずつ奈良や京都あたりに遺っております。そういうようなものを合わせますと十三あります。そしてその下が五十六派(昭和九年現在)にわかれていて、それにみな管長があります。自然そういうように、宗旨がわかれています。導くところの教義も異なっているというわけでありますが、それを大別してみますと、聖道門と浄土門とになります。

もっとも、同じ浄土門といっても、真宗と浄土宗

とは、そこは大分ようすがちがいますが、要するに、だいたいからいえば、浄土門であって、他力本願ということを主にしていく宗旨であります。

他力ということは、阿弥陀仏の力にすぐわたくしということでありまして。これはおたがいを、仏教のことばでいえば、凡夫ということにして、とうてい自分の力では成仏できないから、阿弥陀仏の本願力によって、すぐわたくし成仏するといふ説かたであります。それで、この他力というのに対して、他の聖道門といわれるところの宗旨を、自分の宗旨といっております。しかし、この自力、他力ということばは、私どものような聖道門に属す禪宗などから、もうけたことばではなくて、浄土門で他力を説かれるのに対して、その一面を自力といって、いろいろ対照されているのであります。

それで要するに、十三宗にわかれていまして、大体をいえば、以上のように自力の宗旨と、他力の宗旨ということになるわけでありまして。これからみると、いずれにしても仏教はいわゆる力の宗旨であ

ります。が、本日は浄土門でなくて、いわゆる自力の宗旨に属する禅宗の立場からお話をするつもりであります。

ところで、仏教の大極からみますと、自力とか他力とか、浄土門、聖道門というようにわかれています。しても、結局、帰着するところは二つはない。どうしてかといえ、一つの釈尊の口から出た仏教が、しばらくわかれて浄土門、聖道門、もしくは自力、他力ということになっているのだからです。

その自力と他力ということをととえてみますと、ここに、磨けばりっぱな玉になる石があるとします。「これは良い質の玉だからあの人の手にかけて磨かせよう」というので、玉磨きの腕まえを選定して、その人の力によって立派な玉に磨きあげられます。この方面からいえば、これは他力ということになります。けれどもどれほど腕まえのよい人でも、炭団を磨いたのでは玉になりません。普通の凡石を磨いても、ダイヤモンドにはなりません。そこで腕まえのある人に磨かせて、玉の光がでるといふのは、石

そのものが玉の本質をもっているからであります。ですから石そのものが、元来立派な玉の本質をもっているということ、これが自力の道理であります。

だから玉になるには、結局、自力、他力両方ともに必要であるということになるわけでありませう。

もう一つたとえて申しますと、秋になって、渋い柿をもぎとり、皮をむいて甘干（まほし）にするのに陽の当るところに干しておきますと、太陽の光線に照らされて、りっぱな干し柿になります。これは他力であります。けれどもそれが太陽の他力に照らされて、甘い風味が出てくるということは、柿そのものが本質としてそれを持っているからであります。この柿そのものが、本来持っているということからいえば、これが自力の方面になるのであります。

ですから、どれ程の玉磨きが上手でも、炭団を磨いては玉になりません。どれ程鏡を磨く人の腕まえがあっても、瓦を磨いては鏡になりません。磨いてりっぱな鏡、りっぱな玉になるといふのは、そのもの自身が、本来りっぱな本質をもって（以下次号）

生きてゐる観音経 光山善雄

兵庫県福崎町 西正寺

明 る い 生 活 (特一)

积尊は女性問題を取りあげて、女性としては第一に育児、第二に宗教、第三に家庭の柱となつてもらいたい。その中で育児は女性の使命であり、子を生み、子を育てることが婦人としての大役であります。男は結婚して種子を植えつける役、女性はその畑となつて立派に子種を育てる役です。肥えた畑に作物の種子を蒔けば作物は出来ましようが、よい種子を蒔かねば効果はありません。釈迦も孔子も天より降つて来たものでなく、女性の生んだ宝であります。よき子を生むも悪しき子を生むも女性の方に責任があります。単に生み放しでは子供は立派に育ちません。

観音さまのような美しい立派な子が生れたなら、家庭は繁昌し明るくなります。社会は浄化されて、

世界は平和な楽土となりましょう。もし悪い子が生れたら社会は悪化し、世界は争闘の場となりましょう。それで积尊は申されました、「また女人有りてもし男を求めんと欲して、観世音菩薩を礼拝、供養せば、すなわち福德智慧の男を生まん」と仰せになつて人間の要求、女性の希望に答えておられます。

立派な男の子を生めよ、それには「観音さまを信じ、御供養申せ」まことに簡単であります。信仰の余徳として「福德のある智慧のある子供を授けてやる」とあります。人間にとつてこれほど大きな幸福はありません。

家庭が乱れて、暗い家庭、問題のある家庭にはよい子が育つはずがありません。

日本は現代世界一の教育国と申し、戦後は特に田舎にいたるまで、豪華な校舎も出来ましたが、第一に心の教育が欠けておりますから、立派な人間が生れて参りません。よい子を育てるには愛情がある、親切な、信仰心のある先生によつて指導教育されねばなりません。日本は子供にとつては世界一の楽土

と申されています。一方交通地獄のために死亡する子供が多いことは世界一と申されておりあります。これでは樂園とは申されません。

積尊は観音経を説法するに当り、婦人問題をとりあげて、よき子を生めよ、よき教育をせよ、それには心の支えとしての観音さまを信心し、礼拝合掌せよ、信仰ある家庭より、立派な子供は育つ、と申されました。昔も今もその真理は変わりません。

福德だけあって、智慧のない人間では理想的人間像とは申されません。理想的人間像に福德、智慧を兼備するを理想とします。

「また女を求めんと欲せば、すなわち、端正にし有相の女の、昔徳本を植えて、衆人に愛敬せらるるものを生まん」とありまして、女の子を希望する者には品格のある美人、徳があつて周囲の人より愛され尊敬せられる女の子を授けるとありますから、人間の要求に答えた希望の結晶と申されましよう。この二求章は観音経の美しき目と申されましよう。

一休和尚の「女ほど世にも尊きものはなし、釈迦

も孔子もひょいひょいと生む」という狂歌が伝わっております。

ある人曰く、「如来」とは如より来ると、如とは女へんに口とかいてあるから「女の口から生れて来たものが如来だ」と申し小話にしたことがあります。が、ユーゴーの言葉に「女は弱しされど母は強し」拙著「希望の生活」の中に「妻としての美は短かし、されど母としての美は永久なり」と書きました。人間の中に女なかりせば人間界は滅亡いたします。子孫の繁栄は女性がもとであります。

花嫁さんは美しいものです。顔にお化粧をして、美しい礼服を着した時は天人かと思われることもあります。子供が出来ますとお化粧ばかりしてはおられず、美しい服装する時間もあります。しかし子を育てる母の姿こそ美しい姿であり、特に赤ん坊を抱えて、「母の乳を与える姿」は観音さまの姿ではないでしょうか。地上における最高の美であるとおもいます。

積尊は無尽意菩薩と対話をされて、……以下次号



大鐘楼

建立に当つて

平沼桐江
(八十五翁)

皆様ご元氣にてご活躍のことと心からおよろこび申し上げます。私すでに六月で八十五才に足をふみ入れました。観音様に守られてと申しましょるか、一昨年从今年春にかけて病院生活をしておりましたが、今はほとんど全快いたしました。

病床におりましても、私としますと鳥居観音に、まだなさなければならぬ物が、一つだけ残っていることに、たまらぬ執念をもつておりました。

その執念が、大鐘楼建立という、当山にとつては欠かすことのできないものであったのです。

考えること、頭を使うこと自体わるいと、医者に強くいわれていたのですが、矢もたてもなくこつそりと、方眼紙に大鐘楼の図面をかいて見ましたが、初めのうちは手がふるえましたが、これも観音様の

ご加護といひましょるか、病院で図型だけはかきました。

その形式は、病床にありながら、いろいろと考えた末かいたものですが、バリ島で椰子の葉でふいた、実に感深く魅せられた鐘楼から得たものを参考にして図面にかきました。

やっとその模型も完成し、設計図も完成いたしましたので、株式会社三信工業が、請負人となつて、契約も成立いたしました。去る七月二十六日吉日を選んで、地鎮祭も盛大に執行することができました。

これに対しましては多くの有志各位のご協賛をいただきまして、建立趣意書も印刷いたしましたので、広く御協助賜るよう、役員各位を始め講中、篤信者の方々におねがいの手配をいたしました。

この最後の大悲願が、完成に向つて工事が始まりました。

観音さまのお力と、多くの信仰厚い方々のご支援を賜りまして、予定しております来春には完成できますよう、心からお願ひ申し上げます。 合掌



西遊記

(其の三一)

岡部千三

通 天 河 (前号より)

びしょぬれになり、氷の上へはいあがって来た。

悟空、八戒、悟浄は、法師のすがたが見えないので、声をかぎりに呼んで見たが、さっぱり返事がない。

「おししょうさまは、ばけものに、水の底へひきこまれたにちがいない。とりもどしに行こう。」

「そうだとも。水の中のことは、この八戒にまかせてくれ。」

八戒は悟空をせなかにおぶい、悟浄もいっしょにつめたい水の底へもぐっていった。どんどんすすんでいくうちに、竜宮のような、それはりっぱなやしきが見えてきた。

「ははあ。ばけものやしきは、これか、ようすをさぐってこよう」

悟空は、えびすがたにかえて門に入り、おくのへやへもぐりこみ、石箱のそばまで、びんびんとはねながらいった。術の力で、その中に法師がいるのをさぐった。

「おししょうさま、悟空がまいりました。すぐさまおたすけいたします。すこしのあいだ、しんぼうしてください。」

こういって、悟空はまた、びんびんと、八戒と悟浄のところへもどった。

「おししょうさまは、石の箱の中においでだ」

「さぞ、きゆうくつだろうな。三人がかりで、その箱をぶちこわそうじゃないか。」

八戒が、まぐわをふりあげるのを、

「さて、さて、あわててはいけけない。」と悟空がとめながら、

「わしにいいかんがある。八戒、おまえはばけものやしきの門のまえで、あいつのわる口をいってくれ、ばけものはそれをきいて、おこってくるだろうから、そこを三人でやつつけるとしよう。」

「なるほど、それはおもしろそうだ。」

八戒は、門のほうへ走っていった。

「やい、ばけもの。でられるものなら、でてこい、それとも、おそろしくてでられないか、アハハハ」
つづげざまにわる口をいったので、ばけものはおこって、やしきの中からとびだしてきた。

「きたな、そうはさせぬぞ。」

まぢかまえていた、悟空と悟浄が、ばけものめがけて、おどりかかって、八戒と三人でせめたてたが水の中のたたかいは、どうしても、ばけものにべんりで、いつまでも勝負がつかなかった。さすがの悟空も、こまってしまった。

「ぐずぐずしていると、おししようさまのいのちがあぶない。このうえは、観音さまのお力をかりることにしてしよう。」

悟空は、八戒と悟浄をのこしておいて、じぶんだけ天上へのぼっていった。

観音さまは、竹のかごをつくっておられたが、

「おお、悟空、まいったか。」とまついたようす。

観音さまは、悟空の話をきかないうちから、悟空のたのみごとが、すっかりおわかりになっていた。

「わかっているのなら、おししようさまをおたすけください。」

「おおすぐにまいろう。用意はできている。」

観音さまは、雲を呼んで、通天河の上までおりた、悟空もあとにつづいていた。

観音さまは、着物のそでから一本の絹糸をぬきとり、そのさきに竹のかごをつけて、ぽーんと川になごこんだ。

「それは、なんのおまじないですか」と悟空がふしぎそうな顔をしてきた。

「だまって見ていなさい。」

観音さまは、じつと川の水をながめながら、
「死んだものはいけ、生きているものはかかれ。」

ふしぎなじゅもんを七たびとなえてから、絹糸をひきあげた、するとかごの中に、一びきの金魚が、ぴんぴんはねていた。

「悟空よ、これが、れいかん大王の本当のすがよ」



鱒

診療所の玄関で、川狐の蛭田条吉が鱒を突く大ヤスを杖について震えていた。上にシャツを引っかけて下にはフンドシ一枚だけである。

付添の男は、いつも中学生みたいな服を着ている半袂部落の寺の坊様で、小男の彼は狐師の脇下から顔をのぞかせて心配そうだった。

「この暑いのになにをふるえてんだ？」

私がつくと、

「別に寒いわけじゃアねえだ。唯、身体じゅうなんだか知んねえが変てこだ」

赤銅色に日にやけた大男の条吉がいったが、齒の根がカチカチ鳴って苦しげだった。これは余程の大病にちがいないのだ。

田舎医者（其の十七）

挿絵

見川 鯛山

「どこあんべ悪い？」

「どこっておめえ、とんでもねえことだ」

狐師がいうと、その脇の下から坊様がいった。

「いいえ、これには訳がありますタ。訳はまず中さ入ってお話しますタ」

と、娘みたいな声を出す。きっと、何かの加減で声帯がおかしいのだ。診察室へ入ると狐師がいった。

「俺、怪我をしてるだ、ひでえ怪我だ」

「怪我？ 場所はどこだね？」

「それがおめえ、大変なとこだ。そこがとっても痛えだ」

「そこ？ そこって、どこなんだ」

私が尋ねると、坊様が口をはさんだ。

「はい、この人が私にあんまりひどいことしなざる

で、ふとしたことからこんなことになりましたです
タ」

「ふとしたことだァ!! なにいうだ糞坊主、俺の魚
を盗みやがって!!」

突然、狐師が怒鳴った。怒りと悪寒でその身ふる
いが床を伝わり柵の薬ビンが小刻みにゆれた。

「まあ待て、ここでけんかしたってしょうがないぞ
あとにしろ、あとに」

私が手をあげて制すると、坊様がいった。

「ええ、そうしますとも、私ァ何もいけませんです
タ、今更、弁解がましいこと。でもひとことだけい
わせてもらいますタ、私はそんな、盗んだなんて」

「黙ってろ、糞坊主!! 盗んだもな盗んだだわな」
「いいえ、そんなことあなた」

と、怪我人と付添人とは、うまくいっていない。

「さあ、もういいじゃアないか。いい加減にして怪
我を見せろ、どこなんだいったい」

たまりかねて私が催促すると、

「ここだ」

狐師がいった。怪我は彼のフンドシの中だった。

蛭田条吉が大事そうにそれを掴み出すと、そこだけ
日やけてないその色白の性器には、不思議なこと
に、ナイロン製の釣糸がクルクルと巻きつけられ、
その途中に真赤な浮子までぶら下がっていた。

「? なんのまじないだ、これは」私がきくと、

「まじないじゃねえだ、むごいことするじゃねえか
俺この坊主に釣られただ」

「ふくれっ面で狐師がいった。

「いいえ私は、そんなつもりでなにした訳じゃ……
でも、もういいですタ。いまさらなにも」

いいかけて坊主が黙った。条吉がいらんだからだ。

「まァ、とにかく、その釣糸をほごさんと」

「はい、私がやります。私が巻きつけましただから
ほごす順序がありますタ」

お坊様は狐師の股ぐらにかがみこむと、紡績工場
の女工さんのような器用な指で、からみついた糸を
ほごし始めた、両手の小指をピンとのぼし、西洋料
理のパンをち切るみたいに上品な
(以下次号)

壹万體
觀音
奉安者芳名

敏稱略

昭和五十一年九月現在

住所	板橋区	〃	所沢市	板橋区	〃	入間市	練馬区	〃	清瀬市	大阪市	福生市	比企川島								
芳名	飯原正信	飯原八重	鈴木欣三	植村セツ	(外一体)	吉田光男	若林武之助	坂口清博	坂口文子	山本十一	井上長次郎	中森トラ	鈴木虎次郎							
住所	杉並区	香川県	横瀬村	目黒区	〃	練馬区	板橋区	豊島区	港区	横浜市	横濱市	ナツカリン								
芳名	黒川宗雄	鴨田久子	三瀬マン	田中宇一郎	田中まり	武関高久	竹林尚廣	桜井鉄一	新妻治郎	楠戸友幸	(外一体)	小林フミ子	小林等							
住所	川越市	品川区	狭山市	八王子市	福岡市	千葉市	草加市	世田谷区	青梅市	青崎市	川崎市	豊島区	目黒区	坂戸町	山北町	豊島区	飯能市	入間市	青梅市	
芳名	青木嘉輔	大越達	山岸武	吉田隆治	齊藤静江	渡辺辰弥	奥村清一	蒲原ケイ一	浜野誠二	馬場昭一	田中一	山口良夫	山田義和	池田益雄	松田益雄	西川節夫	滝田安造	小田徳一	坂本里次	
住所	八王子市	町田市	町田市	所沢市	練馬区	板橋区	海老名市	入間市	金沢市	荒川区	加須市	練馬区	文京区	文京区	文京区	文京区	文京区	文京区	大田区	仙台区
芳名	井口良仁	原笹江	(外一体)	榎原弘之	今泉浩	町田光太郎	三好美恵子	浅見きみえ	(外一体)	吉井公道	屋比久泰一	宇和野房雄	竹野嘉代	鳥居嘉代	木月百代	今井平八郎	鶴田みや子	西川佳子		

住所	芳名	住所	芳名
狭山市	鈴木弥重子	武蔵野市	毛塚満
日高町	小林やい	杉並区	小沢幸夫
横浜市	井出慶一	福生市	藤木滋
茅ヶ崎	大村 潔 大村 馨子 (外三体)	中野区	秋葉幸一
立川市	平 富郎	川口市	富永 澄子
仙台市	須知 榮子	杉並区	荒川 澄子
八王子市	加藤 広義	日高町	田中 明
浦和市	福本 泰晏	〃	逸 見 治 年
杉並区	中村 一雄	練馬区	脇本 敬子
世田谷区	山内 公一	中野区	渡井 克己
浦和市	斉藤 浩	青梅市	中原 照夫
国立市	尾又 里き	練馬区	松葉ミキ
千葉市	古賀 正子	昭和五十一年九月現在	
大井町	藤沢 武彦		
大田区	鶴田 みや子	総計	八、五三二体
横浜市	平山 武雄	内訳	八、四四三 体
日高町	山路 はる	前号	八、四四三 体
		本号	九四体
		内訳	八八体
		内訳	六体
		B A	八八体

芳名	芳名	芳名	敬称略
長沢 綾子	村山 順一	酒寄みち子	
外一九	秀瀬 秀雄	福岡 浪子	
二	宮田 留吉	大畑南海魚	
二	〃 花子	外	
二	鈴木 茂子	金高輝代子	
四	村上 明仁	飯倉 繁子	
二	小林富次郎	坂口 文子	
二	今村 秀峰	一〇	
二	北村 成次	枝久保松三	
二	上原 真流	田嶋 静子	
三〇	中村 竜泉	栗山 きみ	
三	横山 吾朗	田代 隆知	
二	外二	外二	
三	神野 照雄	野村 栄作	
二	田辺 さわ	相沢 咏聲	
五	外二	五	
二	長島 時子	宮田 光子	
二	〃 秀夫	平沼 宏己	
六	滝口常右エ門	二	

般若心經 納経者芳名

昭和五十一年九月現在

敬称略

参道大灯笼奉安者芳名

敬称略

東京	壱基	内田桂一郎
〃	〃	浜口 求
〃	〃	山崎まりえ
〃	〃	鈴木うめ子
合計	四一基	残りが四基となりました。

いつとはなしに、参道を行く人達が、この大灯笼に小石から大石まで、載せて今はうず高くのつています。

いたずらとも思えません、いろいろ調べてみると誰言うともなく、信仰につながっている行動なのです。一つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため、と口に称えながらのせるのです。

奉納された方はめいわくと思えますが、やっぱり奉納された先祖供養ともなるのだそうです。

心が行為として、信仰心の現れと見られます。大灯笼がこうして信仰と結びついています。

芳名	芳名	芳名	芳名
山口 子代	四 大野 ちか	二 武石 武夫	一
吉井 公道	三 中西 和美	二 武石 許子	外二三
吉井 裕美	二 宮本 つね	一 武石 許子	八
吉井 幸司	二 木下 菊枝	外一	
吉井 豊子	二 平沼 とみ	一五	
宮永小登美	二 横沢 ひで	二〇	
松本 正人		二	
		計 三八〇	
		総計 七、七八八	
		写経折本壱巻	
		一、金壱千円也	

一、参道大灯笼う奉安のおねがい
現在すぐ受けられる数は四基です。
代金は壱基金拾参万円也

一、壱万體観音奉安のおねがい（現在八、五三二体）
永代供養 救世大観音堂宇内に奉安します。

代金 A 一金 壱万五千円也
B 一金 壱万 円也

一、心経写経 納経のおねがい（現在七、七六八巻）
壱万巻を目標におねがいしております。
白雲山面白岩の納経塔に納めております。
代金 壱巻 一金 壱千円也

鳥居観音だより

終了した行事と来山状況

四月一日 恒例のつつじまつり開始

昨年より開花がおくれました、気候のおくれを植物は人間よりよく知っているな、と教えられました。十日頃から三ツ葉つつじの花が咲き出して、好季のがさじと来山の方も多くなつて、日曜など人で、にぎわいました。

つつじまつりとは申しましたが、梅、さくら、その他沢山の花が咲いていますから、人の目をよるこぼせるのも無理ないことです。それにうぐいすから山がら、こがらなど小鳥の声もして、春花のまつりそのものでした。

四月十七日 春の例大祭挙行

午前十時三十分本堂法要開始、開祖平沼先生ご夫妻

を始め、埼玉トヨペット社長外十四名 チッカリン社長外七名、広瀬電気社長外役員講中多数の参列者によって盛大に挙行されました。

四月十九日 江古田老ク一行参拝

毎年花の頃江古田の老人クラブ、保田会長さんの、一行が参拝になり、庫裡で和気あいあい、食事をとられながら、老人とは思えない美声で沢山の民謡を披露されました、しかも一行は飯能からバスでおいででしたので、夕刻のバスでお帰りになりました。

四月二十九日 東京福徴講元新妻治郎さん外二〇名一行来山、一行は庫裡にて休けい、いつも必ず、山内一巡参拝されて、中食、たのしい話し合いなどされて、飯能から西武タクシーを呼んで、お帰りになりました。

五月六日 開祖平沼先生ご夫妻来山

連休も明けて、よい天気、到着されるとすぐ本堂に参られて、読経、焼香の後庫裡で、職員の顔をごらんになるのが、おたのしみで、欠勤者でもいると、病気かと心配される、そして職員に経営の状況をお

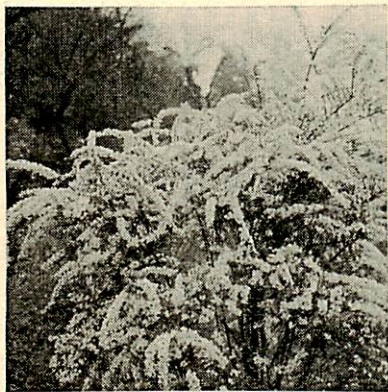
ききになって、注意や指導をなさいました。

それから三峯塔から救世観音へとお参りになり、山上で自然をながめながら、持参された中食を山のベンチでとって下山されました。

すっかりお元気になるまで、

「東京でたいくつになると、もうひたすらに観音様にお参りすることと、このうまい空気と、緑にふれることが、私にとって何よりのたのしみです」

そのお話をうかがって、職員一同感銘しました。



百花の中の雪やなぎ

五月九日 大和拓友会建碑除幕式

午前十時より大和拓友会によって建碑された、記念碑の除幕式が挙行されました。

久保隊長、黒田会長、役員会員百二十名参集。

開祖平沼先生ご夫妻のご参列と、御導師は当山の

小林老師と有馬、鯨井両師によって執行されました。

好天に恵まれ、煙火の音も山内にこだまして会員

一同の感一入でありました。

五月十四日 名和会老人クラブ来山、午後一時半

山内探勝、下山して庫裡で休けいされた。

五月十七日 狭山警察署員三十名来山

五月二十三日 松田江畔先生一行来山

一行は庫裡でそれぞれ画箋紙を展げて、お本によって自由自在に達筆をふるって、たのしまれた。

作品は抽せんによって分配されました。

この日、本堂の前にある、願かけ観音のいわれの文字を松田先生に板書きしていただきました。

五月二十四日 川口市の団体系来山

五月三十一日 平沼開祖ご夫妻来山

六月三日 飯能県税事務所長外関係課長来山

六月四日 青梅市友田より一団参拜

六月六日 塔婆供養申込、東京清野様より十五本

六月七日 越生町小森茂様一行六十名来山

六月九日 練馬自衛隊一小隊来山

六月十二日三鷹市本村さんより塔婆供養申込あり

六月十三日川崎市宮田留吉様、松沢様来山

六月十四日横浜市金高さん来山

六月十五日入間市吉田さん原さん来山

六月十八日浦和市齊藤浩様一万余体観音申込

六月二十日練馬区坂口様来山

六月二十一日大田区鶴田様一万余体観音申込

武蔵野市毛塚様一万余体観音申込

六月二十三日平沼開祖先生ご夫妻来山

カメラマン四名来山、平沼先生作品

仏像撮影開始

六月二十六日狹山市井上様より塔婆供養申込

六月二十七日深谷、大野様より塔婆供養申込

六月二十九日中野、田辺様より塔婆供養申込

六月三十日埼玉トヨベツト轉より塔婆供養三三三

本七月四日 日世田谷新橋様来山塔婆申込

七月五日 練馬平沼様より塔婆申込

七月六日 福岡県より吉原様来山

七月七日 川越原田様より塔婆申込

七月九日 川越齊藤様より塔婆申込

七月十日 杉並江崎様より塔婆申込

港区新妻様より塔婆申込

七月十一日川崎市宮田様来山

青梅市小峰様来山塔婆供養申込

七月十二日三鷹市宍戸様流灯申込

七月十三日三信工業より大鐘楼建立地下見来山

七月十四日板橋植村様来山

七月十五日中野倉田様塔婆供養申込

七月十六日塔婆供養 午後二時より

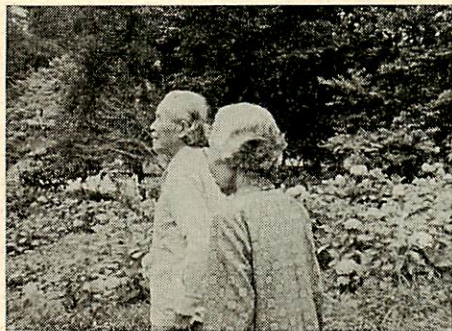
東京のお盆に合せて当山の塔婆供養の行事も日は浅いけれど、年々その数も皆様の厚い信仰によって増加して、本年は五百本に及びました。

暑中故か来山者は少なかったが、毎年必ずご来山

いただいている。港区の新妻さんご一行と一般参拝者によって、塔婆施餓鬼供養が行われました。

七月十八日、紫陽花あじさいの花が見頃となる。

東京方面からくらべると一ヶ月もおくれるのが常ですが、今年は特におくれました。しかし花が今頃は少ないために、当山の紫陽花は大変よろこばれます。又色が空気がきれいなためか、あざやかです。



あじさい園の平沼先生夫妻

七月十八日 八月十六日流灯の申し込多数

七月十九日 大鐘楼地鎮祭準備のため、三信工業より関係者来山

七月二十一日 おくれた梅雨も明けて暑くなる

平沼開祖先生御夫妻来

山七月二十二日 役員会開催

午前十時より昭和五十年年度、決算について監査のため監事会を庫に開催。

午後一時より同案件について責任役員会を開催して、事業並に監査報告あり全件承認、午後三時終了

七月二十四日 入間市吉田様より流灯申込

七月二十六日 大鐘楼建立地鎮祭執行

午前十時より白雲山、中腹に大鐘楼の建立地鎮祭が、小林老師によって執行されました。請負人は、株式会社三信工業で、発願主平沼先生始め埼玉トヨベット三名、山口貴美子、黒田博、埜銀、大栄、武州印刷、井上、若林、鬼春人諸氏のご参列により盛大に進められ、三信工業の服部雄次副社長によって鉄入が元氣よくなされるのを一同ジーンと見守って

おられた。地鎮祭場には青写真も貼られて、平沼先生から設計についてのご説明もあって、やがて落慶するその様子が見えるようでした。

七月二十七日 鴻巣市吉田様流灯申込

七月二十九日 羽村町宮沢様、坂戸町平井様より、

流灯申込 引続いて多数受付

七月三十日 渋谷区桜ヶ丘、斉藤氏外三名本堂内

の仏像撮影のため来山

八月一日 飯能市水上様、渋谷様、流灯申込

大鐘楼資金奉納金の申込あり

八月三日 トヨベッコロナ会来山

八月四日 東京江崎様、本村様より流灯申込

八月五日 入間市吉田様、名栗平沼清様、川口市

富永様、飯能市小林様、流灯申込

八月六日 入間市粕谷様、港区新妻様、海老名市

三好様、流灯申込

八月七日 目黒若林様、練馬津村様、川越原田様

練馬滝田様、秩父小池様、名栗地区流灯申込

八月八日 瑞穂町鈴木様、大宮谷戸様流灯申込

八月九日 三信工業様、関川様、畑様流灯申込

八月十日 名栗地区流灯申込

八月十一日 所沢小山様、板橋榎本様、流灯申込

八月十三日 流灯申込の灯ろう記入及受付

八月十四日 東洋ハウジング様より大鐘楼資金奉

納がありました。

八月十六日 流灯法要 午後四時本堂

当山の行事中一番盛大な行事となりました。

これも信仰厚い多くの方々が、ご自分から祖先の供養をなさろうとお考えになっていられるおかげです。又当山の使命もここにあるわけで、この日をおまちしていたのです、が不幸にして天候も思わしくなく、折角東京、川越等から団体バスでお越しただきました、が、心ゆくまで流灯にご参加いただけなかったことを惜しく思いました。

本堂法要は勿論、千数百の絵灯ろうに火が入られ、名栗川原で読経と共に流灯する様はまさに人間と仏の結び会いと申してよいと思えます。

ご自分で流灯なさる人、手伝う人、夕圍の中に、

明めつする焰は、蓮の掌の上におどるかのようです。

。名栗川の清流は流灯にふさわしい川です。

流灯が終了すると例の花火大会となりますが、雨に煙った川原の仕掛花火は惜しかった気もしました。雨も小止みになったので、広場に用意されたやぐらを囲んで、盆踊り大会がくりひろげられました。見る人、おどる人夏の夜雨涼を呼んで、ゆかた人はたのしそうにおどりました。

このような大行事ですので、手不足に加えて、諸事整わず失礼いたしましたこと深くおわびします。来年も本年に増して御協力をお願いいたします。

八月二十日 大鐘楼資金本納受付 板橋望月様

八月二十一日 三信工業大鐘楼建立に着手

大鐘楼建立資金本納 飯能吉島様墨田区松尾様

八月二十二日 入間市吉田様夫妻来山

夏休みも終りも近い日曜で、多数来山あり。

八月二十三日 写真撮影前回に引き続き入山

八月二十六日 三鷹の宍戸様外十名来山研修

八月二十七日 練馬松葉様 一万体申込

八月三十日 平沼開祖先生、入間市小田様来山

大鐘楼資金本納 東京渡辺様

八月三十一日 大鐘楼資金本納東京杉山様

九月一日 写経折本申込 東京近藤様

九月四日 大鐘楼資金奉納 入間市吉田様

九月六日 写経納経 平沼とみ様 武入許子様

九月二十日 鳥居観音追善供養 午前十一時

当山開創に最も因縁深い左記の仏様の供養を秋彼岸入を選んで執行いたしました。

往蒼院天真源雄居士 昭和四年二月十日没

信行院徳室妙鑑大姉 大正五年十月二十六日没

崇信院徳園清寿居士 昭和三十四年十二月六日没

開基家先祖代々 各霊位

平沼先生御夫妻、御兄弟姉妹、御子様、御孫様、

役員参列いたし、おごそかに、そして感謝の念一杯

に各々焼香をすませました。

久方振りの会合に、四方山の昔話にその名残りは

つきることがありませんでした。

この因縁深い仏様は当山開創として尊ばれます。

これからの行事

十月十七日 月例法要 小林老師

十月二十五日紅葉狩り始まる

年と共に紅葉樹が成木してきたので、紅葉の色も格別うつくしく来山者は目を見張ります。いよいよこの日から開幕されて、約一ヶ月紅葉は探勝していただけます。

十一月十七日 秋の例大祭

午前十時から例によって、本堂法要に開始されます。紅葉も中般というところと思われまますので、当日はごゆっくり御参拝と御探勝下さい。

十一月三十日 紅葉狩 終了

紅葉狩が終了すると、白雲山は静寂そのものに返ります。初冬の雲がゆうゆうと東へ流れると、よい天気がつづきます。

まっ白な救世観音が一層空高く仰げます。

こんな時の参拝がよいといつて来山されて、山へ歩いて行かれます。

十二月十日 大黒祭 小林老師

午前十時三十分 仁王門の奥にある、大黒殿まで徒歩で参ります。大鯛の供が先ず目につきます。

財宝にご縁がありますようにと、ぬかずいてしばらく小林老師の読経の中に引き込まれます。

平沼先生が埴銀の本店から各支店へ木彫されて、贈られた、そのご本尊故に尊いのです。おかげ様でいつもご本尊の大黒天に護られております。

十二月十一日 新年祈禱受付整理開始

すでに御申し込みいただきました、新年の祈禱の御申し込みを整理して記帳、札作りを始めまして、十二月末日まで続けます。

今年も十二月二十五日頃までに沢山のご祈禱をおねがいたします。

十二月三十一日 除夜の鐘

午後十一時三十分頃から小林老師を始め関係者一同が本堂に集まって、読経のうちに百八の鐘をならします。小さい置鐘ですから音もちがいます。

来年のおおみそには大鐘楼の鐘がきかれます。

その他のこと

鳥居観音経営に当りまして、いつも働いている者はどなた様に限らず親切にいいいをモットーにして接するようつとめていますが、山育ちのそっけない者ばかりなので、おゆるしいただきまして、今後共よろしく親しく御ねがいを申し上げます。



鳥居観音で働く人達

鳥居観音の経営で一番力を入れておりますのは、よい空気の中によい自然と、よい宗教的環境をつくるべく働く者一同が話し合つて、日々相つとめております。その中で一番大切にしているものは花木のつづじの手入と、もみじの木の撫育です。

最近あじさいにも力を入れて増殖したり施肥をして大株にしようつとめています。

建物の管理保全是開山四十年にならうとしていまして、この改修にも着手したく考えています。

山内のうっそうとした自然林は緑と水に調和しておりますので、これからはこの自然を求めて来られる人が多くなることと思います。

当山は理くつなしに、信仰心を教示できる霊場として大きくなりますよう念じております。合掌

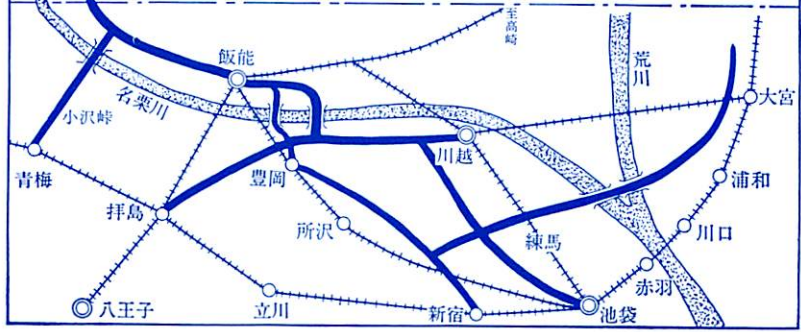
とりあ 第三十七号 発行日 昭和五十一年十月一日

編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三

印刷所 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社

発行所 鳥居観音 電話〇四二九七―九一〇四一七

白雲山 鳥居観音 観世者センター案内図



秋の行事

- 紅葉狩り 10月25日
11月25日

全山紅葉の美はすばらしいものです。

- 秋季例大祭

本堂 10時20分

玄奘三蔵塔 11時20分

救世大観音 11時40分

- 大黒祭

大黒殿 10時30分

新年の行事

- 昭和52年元旦祈禱のお知らせ

12月から祈禱の申し込みをおねがいします。

52年1月1日～3日 本堂……10時より

4日から配送を始めます。

(お問合せは TEL 04297 9 0417へ)